

道徳副読本

中学生の新しい道通信

創刊準備号

特別座談会

瀬戸眞先生を囲んで 『中学生の新しい道』の道徳教育

本書は30年以上におよぶ、中学校道徳副読本としての実績があります。このたび平成17年度版として内容を一新した機会に、本書の十全な理解と発展、道徳授業の確実、かつ高水準の実践、真の道徳教育追求の一助に、定期刊行物を発行することになりました。本号はそれにさきがけ、各号全体の主旨・構想を確認する目的で開催された座談会を掲載します。関係各位のご高評を賜れば幸いです。

平成17年11月

株式会社日刊企画

出席者



瀬戸 眞 先生
Seto Makoto

元文部省初等中等教育局主任視学官
元島根大学・大学院教授



林 泰成 先生
Hayashi Yasunari

上越教育大学助教授
放送大学客員助教授



野口 隆司 先生
Noguchi Takashi

入間市教育委員会学校教育課指導主事



岡本 弓子 先生
Okamoto Yumiko

船橋市立船橋中学校教務副主任
『中学生の新しい道』編集委員会副委員長



大館 昭彦 先生
Oodate Akihiko

流山市立南部中学校教務主任
『中学生の新しい道』編集委員



司会
加藤 弘明 先生
Kato Hiroaki

印旛村立印旛中学校校長
『中学生の新しい道』編集委員会委員長

『中学生の新しい道』

推薦のことば

千葉県中学校長会長 徳富 史述

昭和33年8月に改定された学習指導要領で「特設道徳」が導入され、同年9月から各中学校において「道徳」の授業が行われるようになりました。しかし、指導のための資料がなく、各教員は、文学作品、新聞記事などの読み物資料やラジオの録音などを教材として使用し、十分な成果を上げられないというのが実態でした。

千葉県中学校長会では、道徳教育の重要性と指導のための適切な資料が不足している状況に鑑み、昭和40年代から県内で道徳教育に熱意を持つ校長や教員を編集委員として委嘱し『中学生の新しい道』を編纂・発行し、道徳教育の充実に努めてまいりました。その後、幾度かあった学習指導要領の改定の趣旨を踏まえつつ、3〜4年ごとに改訂版を作成し、読み物資料としての質的向上を図ってきた次第です。

このたび発行した『中学生の新しい道』平成17年度版（中学校道徳資料開発研究会編）は、千葉県内各地域で道徳教育のリーダーとして活躍している教員を本校長会が編集委員として委嘱し、資料のみならず、板書計画まで含めた授業の展開例を示して、道徳の時間の一層の充実を目指して作成したものです。

昨今、青少年に係わる大きな事件や事故が続発し、道徳教育の一層の充実が求められています。永年にわたって編集し、改訂を重ねてまいりました『中学生の新しい道』は、貴重な読み物資料として、貴中学校の道徳の授業の充実に必ず寄与できるものと確信し、採用についてご検討くださいますよう、ここに推薦いたします。

文部科学省学習指導要領準拠
心のノート対応

『中学生の新しい道』

道徳副読本

B5判 各160頁 収録資料数各23編
定価 各550円（税込）



教師用指導書

CD-ROM 3枚セット（内容冊子附）
定価 2,100円（税込）



見本をお送りいたします。お気軽にお申し込み下さい。

発行所（お問い合わせ先）



株式会社日刊企画

〒105-0003 東京都港区西新橋3-15-12西新橋JKビル 電話:03(3433)2675(代) FAX:03(5402)7749
<http://www.nikkan-k.co.jp> Eメール doutoku@nikkan-k.co.jp 郵便振替 00170-7-390510

瀬戸 眞 先生を囲んで

『中学生の新しい道』の道徳教育

- 現代の中学生像
- 中学生にとつての家庭
- 中学生にとつての学校・社会
- 「道徳の時間」の現状と課題
- 『中学生の新しい道』―課題と期待

現代の中学生像

その光と影

いま日本の社会では「子ども」をテーマにしたネガティブな話題にことかきません。大雑把にいえば出生率の減少、育児・子育ての困難、青少年犯罪の低年齢化・凶悪化、あるいは引きこもり、ニート、定職につかないフリーターなどに分類できると思いますが、それらが循環しています。この循環は社会問題として最大のテーマになっています。

子どもが外で遊ばなくなった現実、子どもの目が輝いていないと指摘される現実を私たちが目にするようになってからすでに二十年近く経っています。そうしたなかでの現在の中学生像を具体的に語っていただきたいと思っています。そして、

千葉県の中学校の先生方が編集され、弊社が刊行している中学校道徳副読本『中学生の新しい道』が道徳の時間、あるいは生徒の読書体験のなかで私たちが希望しているような役割を果たしていけるかどうか、ということを最後にお話していただければと考えております。司会を加藤先生にお願いいたします。

加藤 司会を仰せつかりました加藤です。よろしくお願ひ申し上げます。ただいまのお話にありましたように、はじめ、自殺に加えて、明らかに殺意を抱いて友達あるいは親を殺してしまうなど、かつては考えられなかった衝撃的な事件が相次いでいます。新聞、テレビの報道や雑誌に取り上げられているのは、こうした青少年の暗く悪い面ばかりのように思います。これらは全て子どもたちの耳目に

届いているわけで、その影響が懸念される場所ですが、一方で私たちは正義感あふれる姿や思いやりにあふれた姿、スポーツや勉強に励む清々しい姿も間近にしています。光があれば影もある。これは個人にも社会にも当てはまるところではないかと思えます。私たちは光の部分信じ、それを伸ばして、たとえ微々たる光でも、子どもたちが自ら輝く存在となるような教育を目指しているわけです。

本日は、我が国の教育行政の中核に身を置かれ、多くのご著書、編著をお持ちで、私たちに大きな影響を与えて下さった瀬戸眞先生、新進気鋭の道徳教育の研究者である林泰成先生、現在は教育行政のお立場に身を置かれ広い視野で学校現場の道徳教育の指導にあたっておられる野口隆司先生をお招きしています。三人

の先生方には後ほどお話を伺うこととしまして、まずは岡本先生より現在の中学生の良い面、つまり光の部分からお話ししていただけますか。

岡本 昨年から船橋中学校は道徳の研究指定校になっていて、現在全職員が熱心に取り組んでいます。しかし、昨年一年間は道徳の時間によって生徒が変化するような傾向は感じられませんでした。ところが、三月の

末の学校評価の中では「生徒の表情が明るくな

った」、道徳の時間の終末で、自分の生活を振り返る場面では「表現力が豊かになった」という評価が多く出ました。約四十名の教職員の半数がその二点を上げています。

それは道徳の時間に繰り返し、生徒に心情的な刺激を与え続けた成果ではないかと考えています。それと強調したいのは、現在の中学生はかつてよりも純でまっさらな部分があつて、打てば響くような反応の良さがあるのではないかともし

つています。

大館 本校の子どもたちだけではないでしょうが、たしかに現在の中学生は純粋な心をもった生徒が多いように思えます。たとえば体育祭、文化祭などの学校の行事、それが刺激だとすれば、そうした場面では献身的といえるほど友達と協力して頑張ります。そして競技のうえでの勝敗に関しても、負ければとうぜん悔

しいと思うのですが、負けた側が相手に対して「全力が出せてよかったな」、勝った側も同情的で、他者を思いやる気持ちを強くもっているようです。

ただし、あとでお話しますが、それは良い面ばかりとは限りません。

野口 私も現職になるまで二十二年間、教師として中学校で過ごしました。中学校の生徒でも居住している地域によってかなり違います。私の勤務する入間市は狭山茶の産地で、かつては農家の子ども

たちは家の手伝いをすることは当然のこと

でしたが、現在ではまったくといっていいほど、そうした姿は見られません。教育委員会でも学校に要請して、郷土文化にふれる一端として子どもたちが茶摘みをして、そのお茶を地域の人々に配るという活動を行っている学校もあります。そうしたことを続けていると、親の手伝いを嫌がりながらしていた子どもた

光景です。

ちが、喜んで茶摘みをするようになったという事実があります。とても心温まる

生徒の表情を明るくし、表現力も豊かにする

道徳の時間は心情的刺激を与える機会

また市の中心部はベッドタウン化が進んでいて、サラリーマンの子弟が多く地域的な交流は少ないのですが、機会を与えると、熱心にボランティア活動をしていきます。つまり、農村地帯の子どもは親の手伝いを通して、都市部の子どもは人と人の結びつき、そういうことを契機に生き生きとしてくるということがあるようです。

加藤 私の中学生時代の苦い思い出の一

つに、運動会で百メートル走を全力で走らず、先生にひどく叱られたことがあります。むかし（私が子どもの頃）は私に限らず、けっこう冷めている子が多かったように思いますね。いまはそういう生徒は本当に少なくなりました。運動が苦手な子でも精一杯走ります。競技中でもとぎれることなく応援が続きますし、本当に真面目に取り組んでいますね。そして、運動会が終わった後は色別に輪になり、応援団が中心となって反省や感謝を語るんです。語るうちに感極まって泣き出すのですが、見ている私たちも目が潤んできます。

仲間との一体感を求めて、あるいは悔いを残さないようにと、本当に一生懸命になります。心に熱いものがたぎっているように思います。

大館 たしかに体育祭、合唱コンクールでも結果が出てから、相手をたたえ合ったりしていますね。負ければ口惜しいはずなんです……。私の中学生時代にはそんなことができたろうかと考えてしまいます。

岡本 教科を通していまの中学生、ことに男子生徒の目の輝きをみているといいなと思う回数が多くなりました。もちろん、問題のある生徒はどこにでもいます。でも、どんなことであれ、自分の話を聞いて欲しい、自分を理解して欲しい、まっすぐ前を向こうという素直な欲求はとても良いことだと思います。とくに話を聞いてもらったあとの眼の輝きはすてきです。

加藤 男女間の対立などもかつての方が多かったのではないですか。

岡本 いまは仲が良すぎて、あまりベタベタしていると意図的に介入して正しい方向に修正を促すこともあります。

野口 一般に表現力が豊かになりましたね。むかしの生徒は口下手というか、何をいっていいのかわからない場面が多かったです。最近の中学生は、男女間のことにしても、体育祭のあとで泣くということにしても、われわれの頃には考えられなかったことです。感情の出し方が豊かで適切になったといえると思います。もちろん中学生のことですから問題はあ

るにしても、そうしたコントロールがうまくできていけば、もっと個性的な面を伸ばしていけるのではないのでしょうか。

加藤 ハリケーン（カトリーナ）が猛威を振るい、アメリカのニューオーリンズを中心とした地域は大災害となりましたが、恐らく来週あたり、子どもたちは救済募金活動を始めたりするのではないのでしょうか。テレビが映し出す悲惨な状況や世界各国の対応等の情報に対する反応の良さというか、なんとかしてあげたいという心の動きには驚きます。情報量の違いかもしれませんが、むかしはこうしたことはあまりなかったように思います。

子どもたちの光り輝く部分として、表現力の豊かさ、他者への思いやり、ボランティアの精神、人と人との触れ合いの場面に見る純粹さ等、良い面をたくさん語っていただきました。次は、影の部分に話題を移したいと思います。

大館 自分を好きになれない、自分が嫌いだという子どもが非常に多いと思います。自尊感情ともいわれますが、自分の

存在価値を感じられない子どもですね。キレるといふか、どうしてこの場面でそうなるのだろうか、と理解に苦しむことも多いです。他に不登校の問題もありますが、自分を好きになれないこと、それが大きな問題だと感じています。それからさつき出た学校の行事に一生懸命打ち込んで泣くほど感動するわけですが、それはいいにしても、その後打ち上げと称して当然のように外食をして、羽目を外すようなやり方で自分たちを慰勞

することがしばしばあります。自分たちを慰勞するなんてそう簡単にはできないはずですが。

加藤 大人社会の反映ですね。それがほとんど低年齢化している。別の面で気になることは友達同士の人間関係にとっても敏感で、時としてそれが正義や公正に優先しているんですね。たとえば、廊下でも教室でも教師が子どもを叱っている、それを他の子どもは遠巻きに見ている。先生がその場からいなくなると「先

高学年になるにつれ目立つ「規範意識」の低さ

— 自尊心が希薄な子どもたちの問題 —

生、ひどいよね」なんて、叱られた側に同情して、叱る側を悪者にしてしまう。

もう一つ、教師、友達の区別なく、差別的な言動にはたいへん敏感な反面、自分の差別的な言動には無頓着なことが気になりますね。

岡本 まったく同感です。それと私がいちばん気になるのは「規範意識」がとても低いということですね。

野口 どうも暗くなりますね（笑い）。

だからいろいろ施策を作るわけですが、価値項目が22から23になったとき加えられた「公德」ですね。この欠如がわが国の現状における大きな問題だと思えます。

マークス寿子さんという、長年イギリスで暮らした方が、イギリスと日本を比較して日本の若者の現状を憂えるいろいろな本を出されています。そのなかで日本の若者の規範意識、公德心の希薄さを

論じています。今朝もここへ来る際に目にしましたが、電車の座席のまえに飲料水の缶が置いてありました。このようななかで子どもたちはどうなって行くのかなあと思います。もともと素直な良い子どもたちなんです。ところが中学生、高校生になると心にグレーの部分が次第に多くなって、問題を抱える子どもたちが増えてきます。

加藤 いまの子どもを語る言葉として、

二、三十年もまえから、無気力、無責任、無感動、無節操、無愛想と並べて五無主

義といわれ続けていますが、いまだにそれは大きく変わっていない部分があるように見えますね。

規範意識の低さも長年いわれ続けていることの一つです。

また、群れたがるという傾向も顕著です。むかしも徒党を組む傾向はありましたが、良くも悪しくも徒党のリーダーを中心に結束し徒党間の対立はありました。しかし、いまはそれが無い。ひたす

ら孤立を恐れて群れたがる。群れると気が大きくなり傍若無人な振る舞いをするんですね。でも、一人ひとりが個人として行動する場面になると、これがまた妙におどおどして卑屈であつたりするんです。私はここに一人の子どものもつ二面性を見るのですが、どちらも自分に自信を持たない姿と捉えています。

野口先生がおっしゃるように、一人ひとりには良い子どもたちのはずなので、素直でいることは気持ちが良い、無理して突っ張る苦しさは相当あるはず。子どもは本来心の安定というものを求めるものだと思うのですが、それを影の部分に求めるのはどうしてなのか、道徳教育研究とカウンセリングの専門家でもある林先生にお伺いします。

林 私は大学で教えるほかに、中学校、小学校にカウンセラーとして入っていただいています。カウンセラーという立場は、その学校の児童生徒全体をみるというよりも、問題を抱えた子どもに直接関わることとなります。そうした子どもたちの特性として、すでに先生方が指摘さ

れていることですが、規範性の低さ、それから自尊感情がきわめて低いというふたつのことがあげられます。後者は、つまり「自分自身がダメだ！」という感情がとて強いということ。そのふたつが連動して、いろいろな問題がおきるのではないかと考えています。

たとえば、規範意識が低くても自尊感情が高ければクリアできる問題もあるし、逆に自尊感情が低くてもルールがあるんだから破っちゃいけないんだという規範意識が強ければクリアできるということがあるわけですが、ふたつとも弱いとなかなかうまくいかない。

具体例をひとつあげます。ある中学校で友達に嫌なあだ名でよばれた生徒が、よんだ相手を階段から突き落とそうとしたんですね。それを担任の先生が止めて、その生徒が先生に連れられて私のところへ来ました。「止めてもらってよかったですね」というと、「なんで？」とその生徒が私に聞くんですよ。「だってケガをさせたら大変なことになるよ」というと「それは当然でしょ。だって相手が自分のこ

とを悪くいったんだから」と答えました。

私は自尊感情の問題がおおいに関係していると思います。嫌なあだ名でよばれただけで、相手に大ケガを負わせるような行動に出してしまうわけです。どうよばれようが自分は自分なんだという思いが強ければ、そんなひどい行動には走らないと思うのですが……。そんな事例がいくつもいくつもあります。

心理療法のひとつである交流分析の立場ではストロークという言葉によつて人と人の関わりを説明することがあります。人間はだれでも人に認められたい、誉められたいという感情があつて、それをプラスのストロークを求めるとよびまくら頑張っても人に認められないという状態が続くと、こんどはマイナスのストロークを求めるといふ行動に出ることがあります。それは怒られてもいいから人に注目されたいということです。非行問題なども、交流分析の立場からはこのように説明されています。そう考えると、子どもたちは周囲との関係を作りつつ自

分の居場所を求めるわけですね。

ところが最近、それだけでは説明がつかないと思われるのは「引きこもり」「不登校」などの問題です。むしろ関わりを作ることから逃げています。それも「心の安定」の一形態かもしれません。つまり誉められることで心の安定を得るのとおなじように、面倒なことから逃避する、身を引くことで心の安定を得ているのかなとも思います。

「心の安定」という言葉は子どもたちのプラス面、マイナス面を説明する原理になっていいると思います。

瀬戸 子どもというものはもとと素直なものなんです。感じたままにいう、快いと感じたことはそのまま言葉に出すものです。視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の五感のほかに第六感というものがあるといわれたりしますが、これが満たされれば良いということもあります。つまり、そうしたものを充足することで自分を安定させてしまっていることも事実でしょう。一人でいてもいいし、みんなと関わってうまくいけばそれもいいという

ような。

たとえばテレビゲームなんかがありますね。それを長時間やっていて満たされていればそれでいい、みんなもそうやっているんだからということですね。自分をそこへ位置付けて楽しんでしまう。しかし、そうやって時空間を表面的にだけ捉えないで、物事は重層的、あるいは関連性をもつてできているのですから、もつといろいろな面から深く考えてもらいたいんです。こういう成り立ち、こういう意味があるのだからこう判断し、行動すればいいんだということについて、知らないし、疎いのではないか。また、知らされていらないんじゃないかという気もするんです。だから電車に乗っていても人に対する接し方、話し方、礼儀の問題も含めて、つまり規範に関していえば、単発的な事例には出会っているのでしょうが、どんな意味、どんな理由があつてそうしたものが成り立っているかということについては親からも教えられていないのではないかと思うんです。家に帰っても両親共働きの家庭が多いですから、

子どもに話を聞かせて、子どもが涙しながらそれを聞いたというような、心への関わり、意味への関わりが大変に弱くなっていると思います。

私たちは林先生も含めて大学やいろいろなところでなにが正しいか、なにが本当かということを追求しているわけですね。そうしたときにいろいろな関連性を問うこと、それを求めることがどれほど意味があるか、大切かと思うのですが、そうしたことを子どもたちに学校で、あるいは親が教えているのだろうかと思えます。特に中学一年生はまだ小学校を引きずっていますから、算数から数学へ教科名は変わっても内実はまだ算数なんです。数字をお金に換算したり、リングがいくつといくつでとか、具体的な数で繋げて計算しています。ところが中学二年生になると、A+Bとか抽象的な概念が導入されてきます。英語でいえば「おれはあいつが好きなんだ」といういい方と「おれは好きなんだ、あいつが」といういい方の違いを学ばなければならなくなります。

つまり概念化、異文化等との接し方を学ぶ中学二年生というのは、思春期という大人になる入り口で、人生とはなにかというようなことを考え始める、自分の現実認識の形成過程にあります。意味あること、価値あることと自分の現実という一見ばらばらに見えるものが結びあつていくときに、それまでとは違った概念化、抽象化を学ぶことに失敗すると「数学嫌い」「英語嫌い」になってそれが固定化してしまう場合がしばしばあります。それを私たちがどう援助するかという大きな課題です。

心、意味への関わり「中学二年生」時の重要性

思春期の混乱をいかに乗り越えるか

つぎに集団と個ということについて、昔の心理学では最初は雑多で低次な欲求がだんだん昇華されて、高度な自己実現に向かうというように分類されていたことがありましたが、それを古くさいというのではなしに、いろいろな成長の過程で、仲間がいた、先生がいた、自分の考え以外にも、もっとちがう考えがあつて

それとぶつかり合ったとか、多様な経験を経て次第に高まっていくことに気づかせてあげることが大切です。

もう一点、批判精神について申しあげます。情報というものは、とくに子どものうちは一方的な情報にばかり接しているとそれに左右されてしまうんですね。漫画なら漫画、ビデオならビデオですが、子どもがそれを何十回も見ると、子どもの場面でだれがどんな表情でなにを

から抜け出せない人間になってしまふ。新聞でも各紙それぞれの主張ででき上がっているのですが、一紙だけ読んでいるとそういう主張をするようになります。

そうしたことを考えると、自分の調和を自分自身で選択できるようにすることが大切ではないでしょうか。また後で触れると思いますが、道徳の時間との関わりで多様な価値観というものを引き出して気づかせてあげるといふことに留意したいですね。

さきほどの子どもの表現力、表情が豊かになつたという話

どうか、だれがいつ笑うか全部覚えてしまつても、まだ見ている。ということとは、そうした情報をずっと受け取り続けると、自分がそれに同化、同質化されてしまつて、それを批判しようとする自分の思想なり精神が消えてしまふ、隠れてしまふということになるんですね。学校でも小、中、高、大学と指導された先生の授業や講義だけを受け入れてしまつて、それ以外のものに目を向けないと、そこ

ですが、限られた範囲ではそうかもしれません。しかし、一方では子どもが表情に表さないということもありますね。人に会つて、うれしくてもううれしそうな顔をしませんね。困った人を見ても「どうしたんですか？」といえない。電車のなかでお年寄りが自分の座つている座席のまえに立つても「どうぞ、お座り下さい」といえない。尾田幸雄お茶の水女子大学名誉教授が「徳」の字の語源の話をして

くれたことがあって、正字は一四画ではなくて一五画で、一一画目、心の上にならなくて「徳」になっています。「直」ということに繋がっていて、人間が感じ取った素直な心をもって行うということだと思います。ですから思っただけではだめで、道徳とは「行う」ということです。ゴミが落ちていたら思わず拾うということ、そこまで行かないと道徳とはいえない。真理の追究とか単なる学問ではなく、行動との繋がりが私たちにはどうやったら可能なのかということですよ。

繰り返しになりますが、子どもの表現力が豊かになったとはいっても、それは与えられた課題についてはそうであるかもしれないけれども、その場にふさわしい言葉で会話をする能力は貧困かもしれません。それは現代の日本人全体の傾向ともいえることです。外国人と接する機会があっても黙ってニヤニヤして、なかなか自分の意見がいえないうようなことがあります。

加藤 大事な分岐点である中学二年生といえれば十四歳ですね。いま私は『十四歳

からの哲学』（池田晶子著）という本を読んでいます。たいへん面白い。十四、五歳で一度は考えておかなければならないこととして、「言葉」「自分とは何か」「死」「心」「体」「他人」「家族」「社会」「規則」「理想と現実」「友情と愛情」「恋愛と性」等々、三十のテーマを取り上げています。ものごとの真実を見極めようとして考え抜くという習慣の形成を図ることが、この年頃からスタートすべきと思うのですが、それが今の学校教育に欠けている。瀬戸先生のいまのお話と関連させるとさらに興味深いものがありますね。

岡本 さきほど林先生がご紹介下さった事例で生徒が発した言葉は、私たちは毎日のように学校で聞いています。どうしてなのかしら？ と思って絶句することがしばしばです。

大館 光の部分との裏返しになるんですが、人間関係の築き方が実に不器用というか稚拙ですよ。友達、親友という言葉はよく耳にしますが、内実はといえば、必ず連れだつてトイレに行くだけ

というような、表面的な付き合いに終始している。そうした関係しか持てないような気がしています。

中学生にとつての家庭

——道徳性の基盤——

岡本 中学二年生では家庭科で「保育」を学習しており「虐待」について生徒に新聞記事を集めさせてレポートを書かせています。また、親に刃物を向けて殺してしまうような事件が頻発する世相なかで「自他の命を大切にしろ」というルールをだれがいつ教えているのかということに大変興味をもちました。そこで本校の約半分の生徒に「命を奪うということとはどういうことか、幼いころ親にどのようにに教えられたことがあるか」の一点に絞ってアンケートを取ってみました。

「よく覚えていない」四〇・八％
「教えられていない」三〇・六％
「教えられたことがある」二八・六％

三分の二以上の生徒が明確な言葉で教

えられていないという結果ができました。「教えられたことがある」と答えた約三分の一の生徒にはどんな言葉で教えられたかについて答えてもらいました。

大多数は「刑務所に入れられる」「手錠をかけられる」「地獄におちる」「家族に会えなくなる」「殺した相手の家族に恨まれても知らないよ」という言葉で集約されるようです。

但し、少数ですが「殺人は世の中でもっとも重い罪だ。謝っても許されることではない。罪を償うのは本人だけでも、その家族、とくに兄弟、姉妹は一生殺人者の家族として世間の冷たい視線を浴びることになる。このことは絶対忘れてはいけない」「殺人は一瞬にして起こりうるが、殺した者は殺された人よりもずっと長く一生苦しみ続けることになる。人を殺すことはいくら後悔しても取り返しのつかないことだ」「両親はいつでもぼくを家の宝だといっている。その宝が殺人を犯したら宝がなくなってしまう。刃物をもったらいつでも深呼吸して弟や妹の顔を思い浮かべなさい。そういわれ続

けてきたし、いまでもいわれている」と教えられたという答えがありました。

残念ですが、こういうふう具体的に書いてくれた生徒は、約三〇〇名のうちの1%ですから、ここに上げた例だけということになります。

社会の規範はもとより、テレビ、新聞で頻繁に報じていることでもあり、最も重大なことである「人の命を奪う」ことに關してすら親からなにも教えられていない、話をしたことすらないとすれば、そうした子どもたちが小学校、中学校へ来ているわけですから道徳の時間を最大限に使って真剣に教えなければいけないと思います。

加藤 家庭教育の貧弱さが岡本先生のお話からも理解できます。保護者参加型の道徳授業等は、家庭教育や親も視野に入れた教育の試みともいえると思うのですが、無防備ではできません。

たとえば、「いじめ」を取り上げるとします。そのなかで、うっかり親の意見でも聞こうものなら「うちではやられたらやり返せと教えています」なんて答え

る人もいて、なかなか難しい問題があるんです。

野口 教育委員会がもつ家庭との接点は学校・教師に対する苦情処理の場なんです。いったん「いじめ」が起きると親は学校へ申し入れをします。その対応如何で教育委員会へ回ってくるということですが、その数は具体的には申しあげられません。たいへん多いです。つまり親と教師との人間関係の結び付きのなかで取り返しがつかない、学校でも処理しきれない問題がたくさん出てくるわけです。

とくに小学校の場合は保護者の年齢も若いですから、いろいろなタイプの親がいて学校の教育方針や担任の考え方が理解してもらえない場合が多いように見受けられます。もちろん担任が親によく説明していかないという逆の場合もあります。ただ、双方が誤解や違和感を抱くのは、言葉の問題だけではないような気がします。もっと人間的な情のふれあいの機会が多くなっていかなないと、このトラブルは今後増えこそすれ減ることはない

でしょう。私たちの仕事が増えるばかりなのかなと危惧しております。

また、私たちの仕事は学校、保護者と連携することは当然ですが、警察や他機関とも連携せざるを得ないが増えていきます。不幸にしたいへん問題のある家庭、その子弟も公教育の場所に存在するということも視野に入れておく必要があります。

瀬戸 かつて「親子関係診断テスト」なるものがありましたね。生徒や親に質問事項に回答を記入させて、こういう親は子どもがこうなるという診断結果を見せて親の反省を促そうとした先生がたくさんいたんですよ。そのテストをいまでも使っているかどうかは知りません。もう五十年もまえの話ですからね。しかし、そうしたものはひとつの示唆にはなると思えます。

また、授業参観日に道徳の時間をあけると、親はいままで「道徳教育は役に立つのか」と思っていたのが、目の前で展開されている授業をみて「これはいい」「そうか、親はこういう立場でいなければ

ばいけないんだ」と考え直す機会になることもあるんです。学校から親に対して「ああしてもらいたい、こうしてもらいたい」と要望するよりも効果があると思います。ただ、現実には参観日を設定しても仕事が忙しいこともあって、なかなか親が来てくれない。中学生になると親に来るなという子どもも多いようですが、学校、行政ともこうした機会を作ることが大きな仕事のひとつかもしれません。

私はかつて東京都の教育委員会で指導主事をやっていたときに、野口先生がおっしゃったように苦労しました。苦情処理なんかでもたいへんなんだけど、校長先生や教務主任の先生方が集まったときに親の授業参観を提案をして、それを実行してもらったことがあります。これが実に効果的でした、親の様子がまるで変わってきたそうです。

PTAというのは校長先生にやらされているという受け身である場合と、自分たちでやろうよという能動的な場合とがあります。このときには前者から後者

に変容したそうです。

つまり学校が親を教育できる数少ない大きなチャンスのひとつが、道徳の時間の授業参観でしょう。

岡本 道徳奨励研究校という立場で、今のお話はたいへん勇気づけられました。じつは来月保護者参観があるのですが、全学年、全クラスが一斉に道徳の授業を展開します。それは去年から続いていることなのですが、去年の成果からいえばプラスでした。もちろん全員からではないのですが、家に帰ってから道徳の授業の続きの話を親子でできましたというような反応があつて喜んでいきます。

今年は二年生の三クラスを対象に助産師さんをおよびしてお話をしていただいて、命の大切さについて考えようという試みがあります。参観日が年に二回あるとすれば、保護者は教科の授業をご覧になりたいと思いますので、一度は担任の教科をやり、一度は道徳の授業をしたかどうかと私もよびかけたいと思います。

野口 中学生になると、参観日に子ども

が親に來ないでくれとよくいいますね。私の家でも例外ではありません。教科だと不得意な子どもが当然いて、親に來てもらいたくないし、親も積極的には行きたくないということがあります。しかし、道徳の時間だと活躍できる、存在感が示せる、一緒になって話ができる面があるわけです。

埼玉でも親に道徳の授業を参観してもらう学校が増えているようです。

加藤 道徳の時間が家庭教育にながしかの影響を与えることができるというお話を聞いて、私も勇気づけられました。たしかにいまの時代であるからこそ、授業参観という機会をもっと大切にしなければいけないと思いますね。

瀬戸 ある中学校では日曜日に講堂にひとつのクラスの生徒を集めて、父兄にも公開する道徳の授業をしたことがあります。ですが、学校ではこんなことをやっていいのか、先生はここまで考えていてくれるのかという驚きの声を親が上げていましたね。じつに感動的でした。

そのあとPTAの会合がありました

が、最大の話題はそのことでした。ですからやり方はいろいろあると思います。が、やる気があるかどうかということでしょう。

加藤 私も三年生を全員集めて私なりの哲学講座をやっているんですが、今度は保護者に公開するのもいいかもしれませんね。笑える話は一つもないということ。子どもたちには甚だ不評なんです。ただ、口コミで私の試みが地域に伝わっているらしいのですが、私の耳に届く評判はいいんです。

大館 たしかに、親と子どもが同じ話をして笑ったり泣いたりできるというのは、ほかの教科では難しいですね。

加藤 私の前任校も文科省の道徳研究校の指定を受けていましたが、保護者だけでなく地域にも公開することを目指していました。学校で行われている道徳教育の内容や實際を家庭・地域は理解していないですからね。それを推進し、家庭・地域との連携を深めていくためにも、学校が積極的に打って出ることにも必要なのかもしれません。

中学生にとつての学校・社会 ——道徳教育の背景——

加藤 次に道徳教育と社会との関係を見ていきたいと思えます。その時代、その時代でいろいろな問題がおきて、そのつど道徳教育について論議されてきました。が、はたして問題は解決されたのか、それとも解決されなのままずっと推移しているのかということについて、瀬戸先生のお話をお聞きしたいと思います。

瀬戸 これはたいへん難しい問題でした。いままでいろいろなことをやりましたが、教育行政的な立場というのは非常に弱いんです。たとえば社会教育の方に働きかけるとか、地域に協力してもらって道徳教育を推進するような組織を作ってもらったりしましたが、いずれも十分な成果が得られたとはいいきれません。たとえば、地域のお年寄りたちが何かの肩書きをもらって生活指導のような形で学校をぐるぐる回るといった試みもありますが、効果という点では疑問です。社

会というのは複雑だし、そこで暮らしている人々は自分中心の考えを持ちがちなのが現在の状況です。

もちろん一気によくとなるとは考えていませんが、どこかポイントをみつけてマスコミなどに広げていかなければなりません。しかし、とにかくやらないよりはやった方がいい。やってもらいたいと思います。また行政という広がりのおかげで、キャンペーンを張ることも必要でしょう

が、行事的に

なるので難しい。なにかいい方法があったらぜひ教えてもらいたいと思います。それと学校との関連でいいますと、いまは地域のなかで学校を選ぶ時代です。あの学校はこういうことをやっている、こんな良い面があるよということについて親は非常に敏感です。そういう学校にたくさん生徒が集まり、その魅力を構成する要素の中心に、人格形成があげられるようになることも大事なことです。社会を変えることは難しいですが、そうし

た努力を少しでもすることが、問題を解決することに繋がると思います。

加藤 私は今もむかしも問題は同じような気がしているんです。では道徳教育の方法というのは進歩しているのかといえば間違いなく進歩しているだろうと思うのですが、成果としてはつきり見えてこない。これは、道徳教育そのものなかに、ある種の迷いがあり、その迷いが

道徳は教育の根幹、人格の完成を目指すもの

——修身教科との違いを明確に主張すべき——

現場の教師にも反映して指導の温度差を生んでいると思うのです。そんな状態からもう脱却していいと思うのですが、そのあたりのお話を瀬戸先生にお伺いしたいと思います。

瀬戸 戦前には修身という教科がありました。教育勅語を基本にして、国民の行動・規律パターンを作ってうまく引張って行った。社会教育という意味で効果をあげるには、教育勅語を作ればいいじゃないかという意見もあります。しかし、

戦後それは批判、否定されたものです。

それにもっと大事なことは人間本来のものに立ち返ってやっていこうということでした。とうぜん道徳とはなにかという問いかけもせざるを得なくなっただけでも、そのなかで修身を否定する動きはとくに先生たちの間で強かった。そのため道徳イコール修身だという短絡的な考え方が生まれて、道徳の時間の特設は軍

国主義に戻す動きだ

という反対があった、それがずっと現在まで尾を引いてい

ますね。大事なことはいまの道徳は修身じゃないんだ、教育の根幹なんだということがなぜもっと強く主張できなかったかということなのです。

教育とは人格の完成、完成はできないけれども完成を目指すものです。これは教育基本法にも書いてあって、この精神は生きていますし、これからも大事なことです。では人格とはなにかといえ、人間が人間らしくありたいということだろうと思います。では人間らしいとはな

にかといえますと、学者を集めて聞いてみるとそれを規定するそれぞれの言葉や定義は違うし、論の立て方も違います。しかし、それぞれがいいんですね。ほとんど納得できます。

教育は完成を目指すのであって、人格はこうだと規定して、こうなれ！ ということではないんです。人格とは何だろうかと問いかけながら完成を目指して一歩一歩前進して行こうとすることにおいて、いろいろな理論の間にそれほど差はありません。

昭和三三年以来の道德の時間の扱われ方について、わかりやすくするために、私なりに次の四期に分けてみました。

- 第一期 形成期（模索期）昭和33～38年。
- 第二期 分立期（討論期）昭和39～59年。
- 第三期 拡充期（浸透期）昭和60～65年。
- 第四期 拡散期？（消極期）現在。

こうした道德の考え方に対して最初に理解して下さったのが第一期の方々で、道德教育が必要だと考えたのは、日本の

教育界のみならず日本人の願いであったと思います。もちろん、さきほど申しあげたように反対はあったし、そのときの為政者の方針も強かったけれども、それを除いても大方の国民の根底にある願いだったと思っています。いまの教育はお上が作ってそれを強制するものではないんだけれども、反対する人々はそう思っていました。第一期はそれを通り越したと思っています。

第二期は、道德についての考え方の基本は変わらないにしても、いろいろな研究集団が出てきて侃々諤々の議論をした時期です。主に教育学を専攻する人たちは自分の経験に照らして理論を組み立てて、関東、関西合わせていくつもの集団がありました。やがてそれぞれピラミッドを形成するような理論集団になって、全国に波及しました。こうしたことの功罪もありますが、集団間の排他的な面は次第に淘汰されていったと思うし、なにより良かったのは熱誠をこめて論争した経過があったことだったと思います。じつに熱気にあふれていました。当時の文

部省のなかでも小学校型、中学校型、心理学派、哲学派、倫理学派などそれぞれ入り組んでいましたが、大きく分けると三つくらいの派に分かれていました。

心理学派というのは年齢によって達成段階を区切って行く。本当はそうではないと思うけれども、そうなってしまおう。倫理学派は人間とはかくあるべしとか、カントがこういつたとか、だれそれがこういつたという具合になって、小学校と中学校の学習指導要領の違いも主にそうしたところから出てきたものです。

第三期は、論争に終始していても埒が明かないものですから、それぞれの理論を弁証法的に言えばアウフヘーベンして、なんとか良いところを認め合って共通の基本になるところを作ろうということになったわけです。小中の学習指導要領も基本は一緒なんだという一貫性をもったものにしようというのが、ちょうど私が文部省に奉職していた時期なんです。

第四期というのは、第三期の熱がさめてきた時期ですね。第三期と比較してみ

ると、第三期の、ことに女性教師の熱心さには心打たれるものがありました。これは日本の学校教育のなかで女性教師に感謝しなければいけない大きな期間だったと思います。日本中のいまでも有名な先生たちが一緒に研究会を作って、一緒に授業をして、年間指導計画も検討して、いろいろな資料を集めてという時期があったんです。ところが、その熱が冷めていってしまった感があります。それがいまの問題だと思っています。

ですから、同じような問題が日々おきて、そのたびに、また同じような論議が繰り返されていますが、では道德の時間も十年一日のごとく同じような形で推移しているのかと問われれば、紆余曲折を経て、せっかく芽吹いた熱い思いが継続していないといわざるを得ません。

『中学生の新しい道』の改定された指導書もいまの時代の流れに添って静かに行くのか、それとも熱意にあふれた指導を興していくのかという分岐のなかで苦労されたと思います。私は、この指導書が再び熱誠に満ちた道德の授業をする突

破口になって、新しい息吹きをよび起こして行ってもらいたいと切に願っています。

かつて金井肇氏（元文部省視学官）から面白い調査結果をお聞きしたことがあります。それは、ある学校で道德の授業をやることに最初は親が反対したんです。受験に役立たないというのがその理由です。そこで文部省がお願いして指定校になってもらったんです。すると、道德の授業をやることで教育全体の成績が上がったというんです。理由はいくつか考えられますが、どの教科の領域も授業をやる際に先生方の苦勞が減ったということです。自分を律するところができるようになった子どもの成績が上がるのは当然だろうと思います。私はそれを聞いたとき、得たりやおうという気持ちになりました。

林 私が研究者の端くれとして道德に関わりはじめたのは、瀬戸先生がいわれた第四期のちょうど熱が下がりましたというか、消極的になっていった時期にあたります。そういうなかで何を感じたかと

いいますと、道德にイデオロギーの対立というものがまずあったということですから。熱心に道德について考える方がおられる一方で、道德は修身の復活に繋がるからダメだという論調があつて、その二つの対立は戦後一貫したものでらうと思います。それが少し変わったなと思えるのは、平成九年に神戸の児童連続殺傷事件が起こってからです。あのあと、中教審が幼児期からの心の教育のあり方についての答申をだしましたね。あの事件を契機に「道德」という言葉ではなく、「心の教育」ということがいわれはじめました。それまで道德教育に対して生理的嫌悪感をもっていたような人たちまでが、そこへ入り込んできたと思います。つまり道德はダメだといっている、では代わりにどうするのか。想像を絶するような事件でありながら、このまま放置すればまったく同じか、類似の事件がいくらでも起こりうるという危機感をだれもが抱いたのだろうと思います。もちろんそのなかでもいろいろな意見があります。

それを受けて文科省が『心のノート』を作ったのだらうと思います。『心のノート』についていえば、中身はとても面白いと思うし、『中学生の新しい道』もそれに対応していますね。しかし、一方

でそれが一種類しかないということに問題がありはしないかとも思うんです。もっとたくさん種類があつて、各学校、各先生が自分の学校、クラスに合ったものを自由に選べるということがあつてもいいと考えています。規範意識の希薄ということがさきほどから話題に上つていますが、その規範意識を取り戻すときには、ではその規範とはだれが定めて、だれがそれを妥当性があると認めているのか。文科省には文科省の方針があるでしょうが、もつといろいろな団体、組織の意見だつてあると思います。そうした意見を自由にいえる雰囲気というのはとても大事だと思ひます。

道徳教育が目指すものは最終的に「自律」だと思ひます。「自律」という観点からみるときに、一方的にある価値観だけ教えて終わりというわけにはいかな

い。子どもたちが自由に選択する、そのまゝに教師が、自分たちが何を教えるかということを選べるといふ社会環境を作つていくことも必要だと私は思ひます。

瀬戸 とても大事なご指摘を受けたと思ひます。「心の教育」という言葉は、「道徳」という言葉を避けたほうが受けがよいだらうという意図もあつて作られたという側面もあるでしょう。そして「心の教育」に「道徳」よりももつと広い意味を込めたというところにもいくつかの問題があります。「豊かな心」といえば「道徳」よりもさらに広い範囲を指すというようにね。たとえば「生きる力」という言葉、概念には「どう生きたらいいか」という意味も含むとすれば、生き方という方法論が入つてくる。そして、総合単元的な学習ということがいわれてきた。そうすると道徳教育はもつと広い立場でやればいいというように受け取る人も増えてくるんですね。学校教育全般で行うというのは「教育」と名前がついてまわるんですよ。たとえば「性教育」とか、

どこでも教えなければいけない、資料を配付しなければいけない。総合単元的ということはいろいろな教科との関連を重視して教えなければいけないということですから、特別学習、総合学習、体験学習、学級活動のなかにも「心の教育」的な考えが貫徹されているわけです。そのため「道徳の時間」と「道徳教育」の境界線がなくなつて、見境がつかない方が増えたというのが現状で、それが教育現場の受け取り方であつた。私はそれは問題だと思ひます。

ですから『中学生の新しい道』も「道徳教育」「道徳の時間」「特活」「総合学習」「体験学習」の区別がつかない先生がみたら、全部に無差別に使つてしまうのではないかと思ひます。広い意味での「道徳教育」と「道徳の時間」の関係はどうなのかも考えなくてはいいけません。

かつて、それで論争をしたことがあるのですが、たとえば「数学教育」といへば様々な機会に「数」に関する教育を行うことを意味しますが、「数学の時間」といえば教科書に則つて数の概念や数式

等を体系的に教えるわけです。「道德教育」と「道德の時間」の関係もそれと同じであって、「道德の時間」は「道德の授業」なんです。ですから副読本の扱いもそうした形であることが望ましいのです。

副読本にスポーツの読み物資料が載っているとして、部活の先生がそれに似た場面に現実として遭遇した場合、「副読本に載っていただろう。だからそのようにしろ！」と言ったら困るわけですよ。

最後には決意

表明までさせるなんて話をよく聞きますが、そういう使われ方は避けてもらいたいですね。

「補充・深化・統合」という言葉がありますが、いまの先生方はそれを理解している方が少ないですね。道德の時間が生活指導になってはいけません。ですから、むかし道德教育に熱心だった先生方が私に「いまの道德の時間はどうなっているんですか。生活指導と変わらない

いじゃありませんか」といつてきます。たしかに道德の時間が生活指導だった時期はありました。それが第一期の模索期なんです。とくべつに道德の時間を設けなくていいじゃないか、生活指導のなかでできるじゃないかという意見が強かった時代ですね。

「道德」はどこまでも「道德」であって他の言葉に翻訳できないんです。強いて翻訳すれば意味が違ってきて、他の雑

多な概念が入って、あまりにも融通無碍になりすぎて、効果を考えても疑問だし、ある意図を込めることも可能ということになれば、逆にもっと危険ではないかと危惧しています。

岡本 いま林先生から『心のノート』のお話がありました、ここにおられる野口先生と協力委員をやりました。

野口 そうですね。『心のノート』を作る時点では宿題がたくさん出しましたが、

使う側のことを考えると文字も少なくして、押しつけにならないようにしていこうということもあつたと思います。写真

だとか絵を多用して、受け入れやすいように出来上がったと思つています。いままだだったら指導書にしか書いてない23の価値項目を、こういう形で子どもたちに直接押しつけてきたなど受け取る人もいます。使用状況の実態調査をしても疑心が深まる向きもありますね。作つた側からは、とてもきれいに使いやしく作つたつもりでいるのですが……。

岡本 満足できるものだと思つていたのですが……。

瀬戸 これはやはり教育というものに国が関わって、国民の学力水準を維持向上し、人間的な……という基本的なものをなんらかの形で学校で扱っていただきたい、注意して大事にしていたいただきたい、ということ、それならなにか形にしなければならぬということから出来上がったものでしょう。そうすると、ほら、

「道德教育」と「道德の時間」の違いとは

総合的な教育と個別授業の関係

やっぱり国の統制じゃないかということになるんです。絶対に統制はしていないんですけれどもそうなる。たとえば副読本でもお説教のようなことが書いてあると、これは行動パターンじゃないか、これを教えろということじゃないかとなります。

しかしそうではなくて、価値について触れているんです。価値について説明しておく、昭和三年の道徳の時間特設のとき、価値項目というのはたくさんありました。それを選ぶとき、倫理学の本から拾ってきたのではなく、国民のなかでいろいろな調査をして、みんなが妥当だと思ふもの、必要だと思ふものを選んだのです。たとえば「人に親切にしよう」「人に意地悪をしてはいけない」というのは当たり前のことですね。そういうものを整理しただけなんです。それがもっと整理されてきて、現在のようになつたんです。それはみんなで自分を見つめてみようよ、人間として満足するとはなんだろうということを考えてみよう、というのが基本的な考えです。ところが、

取りようによつては、ほら、愛国心で書いてあるじゃないか、愛国心を教えろなんて教育基本法のどこに書いてあるんだなんてことになつてしまふ。

加藤 そうした調査によつて価値項目が出てきたなら、国民的合意に近いものがあるわけですから、それをもっと積極的

に知らせて欲しいですね。

林 私はやはり疑つてしまふ方なんですけれども、気になるのは『心のノート』の中身ではないんです。中身に關してもいろいろ批判的な意見がありますけれども、私自身は中身はとても面白いものだと思いますし、大学の道徳教育論の受講生にはコピーを取つてやらせてみたりということをしています。それは批判的

なところではないと、あくまでも面白いからです。ただ文部科学省が作つて配布しているということがどうしても気になるんです。他の教科書には検定はあるにしても複数あり、副読本も複数ありますね。ところが『心のノート』はそれしかないんです。ほかは複数あつていろいろな手続きを踏んでいるのに『心のノ

ート』だけは、なぜそういう手続きもなしに単独で存在するのかという疑問は強く残ります。

岡本 私はあまり疑問も持たずにいたんですけれども……。

野口 文科省ではそれ以前から、読み物資料やビデオ資料を作っていたんです。それがなかなか使ってもらえない、子どもたちの心に届かないということもありました。『心のノート』は児童・生徒一人ひとりに行き渡り、一歩踏み込んでいます。国として積極的だなと思つて、その時点では疑問は感じませんでした。しかし、現在は林先生のお話のようなこともあり、現場からはこれだけでは使いづらい、もっとバラエティーがあつた方がいいという意見も届いています。

加藤 これは現場の先生の力不足という側面もあると思います。指導書は使い方をワンパターン化するという意味で、ないほうがいいのかもしれないんですが、どう使ったらいいんだということ、現場はすぐに指導書を求めます。一種の權威依存と教材研究のゆとりや感性の不足が根

っこにあるように思います。『心のノート』の使い方はもつと多彩に模索されていいと思っています。

瀬戸 たとえば「親切」という項目のなかで、考え方のプロセスまでが暗示されているようなことがあるかどうか知りませんが、もしあるとすれば、ほかの考え方があってもいいじゃないかということ。一方には出てくるんですよ。かつて文部省にいた当時の方針というのは、読み物資料を読む

だ子どもたちが、Aと考えるかBと考える

るか、それともCか、多様に考えることを望んでいました。自分はAだと思っていたのが、いろいろな考え方を知ること、自分の視野が狭かったことに気づいて、目の前がぱつとひろがるということがありますね。ですから結論を定めて、こう考えろということは絶対いってはいけないというのが原則でした。たとえば、目の不自由な人が街で迷っているのを見るときは、すぐに助けてあげようとする

視野を広げる、多様な思考方法の理解と選択

「道徳の時間」自分を見つめる機会に

る意見、それに対してただ手を引つ張ってあげるのではその人の自尊心を傷つけてしまうという意見。道を教えてあげた後、その人を見つめ、本当に危なくなつたときに自分が出ていって助けるのが親切だろうというように、いろいろな意見があることを理解することが大事なんです。「道徳の時間」は決して価値を教え込むじゃなくて、いろいろな意見に耳を傾け、理解して自分を見つめて、より

広い視野をもつようになることを目指すものであることを理解していただきたいと思います。『心のノート』は授業をしやすいように考えられたのだらうと思います。もし感情、意識、思考方法までコントロールするために用いられたら、それこそ戦前の形になってしまいます。

岡本 私たちは『心のノート』編集の協力委員として最初にいっぱい宿題が出た

んです。それを文科省の先生方にお見せすると「堅すぎます。道徳だけで使うのではないので、もつと視野を広くして下さい」ということをよくいわれました。

瀬戸 じつはそれが問題なんです。『心のノート』が『道徳のノート』だと問題になってしまふ。しかし、ほかのところでも使えるために「道徳教育」「道徳の時間」の本質を薄めて拡散してしまふ人もいます。繰り返しになりますが、私は

そうした方法は浸透ではなくコアを失つたもの、水で薄めたようなもの、もつと

いえば、もしかしたら知らず知らずに、明確な意志を持たせないままあるパターンを植え付けることになりはしないかと危惧するんです。

岡本 『心のノート』は道徳の副読本ではないと文科省はいつていますが『心のノート』が出たことで、もう副読本は採用しないという地域、学校が県単位で増えていますね。たしかに副読本ではありませんから『心のノート』だけあれば十

分だというのは間違いです。逆にいえば『心のノート』だけあればいいというのは「道徳教育」「道徳の時間」をとりまく環境の貧弱さが露呈しているともいえると思います。むしろ『心のノート』を活用するには副読本は不可欠だと思っています。

野口 入間市では副読本を市が無償で配布していますが、そうしたことをやめる市町村もあります。そのような動きは道徳教育の後退だとも思ってしまうのです。

「道徳の時間」の現状と問題

——基本と発展——

加藤 さきほど瀬戸先生から、戦後の道徳教育の足跡を語っていただきましたが、現在は第四期の「消極期」にあたるのではないかとというご指摘を受けました。今一度、道徳の時間の指導について原点に立ち返り、基礎基本をしっかりと押さえることの必要性を説かれたように思うのです。

全国各地で都道府県レベル以上で「道徳研究大会」が毎年のように催されていますが、今までの話の流れを念頭におくと、いろいろな疑問が改めて湧いてきます。道徳授業の現状を皆さん方はどのように受け止めておられるのか、お伺いしたいと思います。

岡本 私の道徳の授業の方法はずっと瀬戸先生の三冊の本『新道徳教育実践講座1〜3』をもとに構想し、実践しています。大事なことはひとりひとりの先生方が、まずオーソドックス（基本）な授業の仕方を身に付けなければいけないと思っていますし、ことに若い先生方には基本的な授業の流れに先生方の個性を交えて構想されることを微力ながら要望し続けてきました。ではオーソドックスとはなにかといいますと、加藤先生の言葉をお借りすれば、教師が明確なねらいを持ち、ねらいに即した意図的な発問で授業が展開し、話し合いを通して、人間として在るべき生き方を見いだし、子どもひとりひとりが心の内面と向き合い、より良い生き方を志向して行くということだ

ろうと思うんです。いくら子どもがいきいきと動いた授業でも、本筋から外れた思わぬ結論を得て、それでいいというものではないと思います。

ある学校に講師と呼ばれたときに道徳の授業を見せてもらったことがありますが、ユニセフの資料を使って主題は「差別」でした。グループエンカウンターで、資源のある国のグループ、ない国のグループに分けてのことでしたが、子どもたちが活発に動き回って交渉するのです。資源のない国のグループに分けられた子どもたちは資源のある国のグループへ行って、いろいろ頼むと「それなら分けてあげるね」とか「仕方がないね」という流れで差別が緩和され、子どもたちも楽しそうだったし、先生も今日はとても充実した授業だったと感想を述べていらっしやいました。果たしてこれで「差別」ということがどんなことか、「差別」「被差別」の重大さ、深刻さが理解できたのだろうかと思いました。さらにいくつかのグループは主題が「思いやり」「協力」だと

思って発言していました。

「道徳の時間」が「特活」に解消、あるいは矮小化されてはいはしないか、憂慮すべき一例ではないかと思えます。

私自身も校内の授業研究、その他で方法として「役割演技」「ゲストティーチャー」などを使っていますし、素材についてもビデオ、写真などの目に訴えるもの、詩などの心に訴えるものを使っていますが、大事なことは主題を外さないということ、いろいろな方法というのはオーソドックス（基本）な方法から派生する一方法だという教師の自覚が必要だと思います。ことに「ゲストティーチャー」をおよびする場合、事前に基本線の打ち合わせができていないと、大幅な時間オーバーだとか、主題からの大幅な逸脱ということも起こりかねません。

大館 私自身もそうですが、道徳の授業をあまり受けてこなかった世代の先生方が多いんです。それで道徳の授業はやりたがらないとか、やり方がわからないとかという例が多いですね。また、一見すると道徳の授業はだれでもやろうと思え

ば簡単にできて、子どもたちも盛り上がるから、まあこんなものでいいかと安易に考えている先生方もいるようです。

道徳の時間に子どもたちが活発に発言することは結構なことですし、エンカウンターそのほか、いろいろな手法があるのは当然ですが、たとえばエンカウンターはエクササイズを体験することだけが目的ではなくて、その後の話し合い（シェアリング）が自分を見つめる契機になるのであればいいのです。しかし、体験のみがイコール道徳だというふうに流れてしまう傾向が多いと思います。道徳にはオーソドックスというか、スタンダードな方法があつて、基本には「補充・深化・統合」という考えがあるわけですから、読み物資料を使ってひとつの主題についてみんなで考えるという時間が中心にあることが必要だと思っています。いろいろな手法、方法は結構だけれども、手段である手法・方法が目的を損なう、逸脱の原因になってしまうということがないように自分を戒めています。

加藤 ある研究授業だったので、グ

ループエンカウンターをやっていますね、主題は「幸せってなに？」ということとでした。子どもたちは「ご飯をいっぱい食べたとき」「友達と一体感を感じたとき」とか、いろいろな幸せの姿を語っていました。そして最後に先生が幸せについて書かれた詩を読み上げて、いろいろな幸せがあつていいんだよねと、結論にしたと覚えていきます。楽しい雰囲気です。先生は満足したような表情でしたね。しかし、これは道徳ではない。人間関係を円滑にするエクササイズにすぎず、あえていえば、学級活動の時間ですねと指摘させてもらいましたが、これに類することはたくさんあるように思います。

道徳研究大会の会場校の授業を拝見すれば、エンカウンター、モラルジレンマ、デイベート、役割演技、ゲストティーチャー等々、いろいろな手法が山盛りです。共通するのは子どもたちも活発に発言して一見楽しそうです。

私は正直いって、たいへん疑問に感じます。授業で何をねらいとして、子ども

たちのものの見方、考え方がどのように高まったか、あるいは深まったかが、たいへん曖昧なんですね。

野口 いまは道徳の授業を見せていただく機会が多いのですが、「道徳の授業が楽しいかどうか」と児童生徒によく聞きます。小学校のうちには楽しいと答えてくれますが、中学生になると楽しくないという答えが返ってきます。これは文科省の統計でも出ています。もちろん先生方もよくご存じで、困っているわけです。そこで私のところへ、どうしたらいいのか教えてもらいたいといってきます。指導方法には、さきほどからのお話に出ているように、いろいろな方法があります。しかし、基本型をマスターしていないまま、変わった方法に頼ると本筋がわからなくなると助言しています。学校によっては模擬授業をしてもらえませんかという要望があって、この夏休みも職員研修で先生方が生徒、私が先生になって道徳の授業を行いました。授業をしながら、ここではこういうところが大事ではないですかというところが進めます。活発なら

いい、面白ければいいということではないのです。

たとえば英語の時間にA L Tが来てゲームをやって、とても楽しかったという授業もあります。しかし、あとで「今日はどうな勉強をしたの?」と聞くと「はてな?」になります。私は英語の授業をするとき、言語材料、学習内容、学習活動の三位が一体になっていて、ねらいが成立すると話しています。道徳も同じだと思います。エンカウンターやデイベートの授業も見ますが、やり込められて泣いてしまう子どももいますね。心を耕すべき時間なのに、この子はどうだったのかなあと、疑問をもったりもします。楽しさや活発さを追求するためにいろいろな方法に頼るというのは本末転倒ですね。まず基本型をマスターする。たとえば子どもの手が挙がらないとしても、子どもたちはじっくり考えているのですから、それでいいんですよと話することが最近多いような気がします。

加藤 素材選択についてはどう感じていますか。ビデオ、写真、新聞記事、詩な

ど様々に取り上げられているように思うのですが。

岡本 もう十年ほどまえになるんですけど、ある事件を報じた新聞記事を使って授業をされた先生がいらっしゃいました。その事件というのは自分の六歳になる子どもを殺されたある牧師さんがいて、そのときご本人がいわれたという「この子の寿命だった」という言葉を巡ってでした。たしかにそれは立派で感動的な言葉であるには違いありませんが、それを評価するということが、当事者ではない私たちにできるでしょうか。当然生徒たちからは「この牧師さんはふだん平和や人の幸せを願っているからそういう言葉が出てきたんだ」という意見が出て、それがいちばん多かったですね。ひとりの父親、人間としての本音だろうかという疑問を抱いても不思議ではないし、もしかしたらその牧師さんにとってそれは本音かもしれませんが、そうした場面に接したとき、当事者ではない人間が考えなければならぬこと、そういうところにまで踏み込んで扱ってもらいたいと

思いました。ですから新聞記事を安易に扱うことの危険性をそのとき強く感じました。

それから自戒を込めて申しあげると、私は詩をよく使いますが、必ずしも作者の表現意図と同じではなくて、そのときのねらいに当てはまるから使うということも多いと思います。国語の先生のなかには反対する方も多いですね。優れた文学作品というのは、作者の意図を離れてもなお通用するということもあると思いますが、注意はしています。それから野口先生たちと文科省が作った読み物資料をVTRにする仕事を三年間ご一緒に、それも使っていますが、VTRを見る時間が十五分というのは長いんです。ですから、どうしても副読本の読み物資料を使う機会が多いですね。

加藤 様々な工夫、新しい方法に飛びつくことは否定はしませんが、あまりにも安易な気もするのですが、こういうものでしょうか。

林 じつは、私たちの研究室でも新しい方法を提案しています。「モラル・スキ

ル・トレーニング」です。身体を活発に動かしたりして楽しいものです。類似したやり方で「ソーシャル・スキル・トレーニング」というのがあって、それも道德の授業のなかで行われています。しかし、それでは不十分だという反省のうえに立っているわけです。なにが不十分だったかというところ、道德の授業としてのねらいがはたしてそれで達成されているかどうか、内容項目としてなに取り上げられているかが不十分だということですね。やはり道德資料で学ぶことが必要であって、そのことと連動させるスキル・トレーニングが必要ではないかと考えたわけです。

それは、いままでの道德の授業のなかで、具体的な行動の仕方を学ぶということができていないんじゃないのかと考えたことが契機になっています。もちろん道德の時間は「補充・深化・統合」の間ですから「座学」として学ぶということとは十分わかっているつもりですが、学んだことが実践で生かされていないんじゃないか、まだ足りないものがあるとい

うことで、それを補いたいという思いから「モラル・スキル・トレーニング」を提案しているんです。ですから、基本形に取って代わるものではなくて、基本形に足りないものがあって、それを補うという意図があるんです。ほかの方法も同じだろうと思います。決して基本形を否定するものではないし、私自身は基本形は大事だと思っています。ただ、オーソドックスな方法というのは、どこがいいのかということも十分押さえておいて、妥当性のある説明をしなければいけません。どんな方法であれ、利点も限界もあるのだと思っています。

それともうひとつ申しあげておくと、研究大会などの公開授業なり研究発表では、新しい方法・新しいアプローチの実践、報告が主流になります。それは基本形をいくらやっても、それは先生方が十分わかりだし、面白くないからというところもあると思います。ただ、新しい方法もやり方を間違えたり、未消化のまま実行するとその方法自体を否定されることにも繋がりがかねませんね。

加藤 私の今までの経験でいうと、オーソドックスなスタイルの授業ができない人は目新しいやりかたをしても、ほとんど例外なく授業はだめですね。逆にオーソドックスなスタイルの授業がしつかりやれる人は、どんな素材でもそれをうまく生かした授業をしているように思います。

あるベテランの先生の授業ですが、たった一枚の写真からスタートして「自分の番 いのちのバトン」（相田みつを）という詩につなぎ、保護者の資料に対する感想を活用した見事な授業展開をした例があるのです。その写真は座布団の上に乗かされた一人の乳児を真ん中にして、温かいまなざしを落とす曾祖母、祖母、近所のおばあさん、若い母とその妹、計六人が写っていました。その写真を見ながら、赤ん坊の周囲の人たちの人間関係を考え、さらに曾祖母が赤ちゃんを抱いている写真を見せて曾祖母の心を言葉にあらわすんですね。このとき、実際の赤ちゃんに近い保育実習用の本格的な人形を抱かせて、言葉をいわせているんで

す。これが臨場感があるんです。一人の赤ちゃんを巡る周囲の温かい心を十分に考えさせておいて、自分に帰るんですね。今までの生活を振り返り、成長を支えてくれた人に①してもらったこと②迷惑をかけてしまったこと③して返したことを書いてまとめらるんです。子どもたちは真顔になっていきますね。その後、詩「自分の番 いのちのバトン」を読み、家族からの感想を聞いて、自分の命や存在について考えをまとめていくんです。見事と思いました。

指導が堪能な先生は、林先生がいわれるように、いろいろな方法を使い、よりいっそう本質を際立たせた授業を展開することができているんですね。そして、他の素材や方法と組み合わせることでこのようにタイムリングで展開するんです。

岡本 林先生がさきほどおっしゃった、足りないところを補うというのは「道徳的实践」なのか、「道徳的実践力」なのかで少しずつ違ってくると思うのですが、生徒にアイマスクをさせて、ふたりに組んで階段を下りたり廊下を歩いたり

ということを学級活動の時間にやりました。そのあと道徳の時間に障害者を主人公にした資料を使った授業を行ったときに、その体験がとても生きてきたという経験があります。また、『中学生の新しい道』に「干潟を守る」として載っていますけれども、前任校が谷津干潟に近かったので、干潟の清掃に行ったことがあります。そのときは三時間体制で、一時間目は全校集会として「どろんこサブウ」の実在のご本人のお話をお聞きして、二時間目は体験学習として干潟の清掃、三時間目は日を改めて道徳の時間として「干潟を守る」をやったんですね。そのときのことを思い出しますと、生徒たちがとても落ち着いて、いろいろな意見を発言できたということが印象に残っています。「特活」でやったことを「道徳の時間」に想起させながらやるというのも効果的です。「実践力」をつけるという意味もクリアできるかなと思っています。

加藤 特活というのは集団としての意志決定をどうするか、集団として決定され

た意志に個人としてどう関わっていくかを考え、態度決定していくことを通して人間力を高めていくんですね。そのあたりがわかっていたら、特活と道徳を組み合わせた指導が生きてくるように思うのですが。

大館 体験はとても大事なんですが、体験させっぱなしでなんとかなるというものでもないと思います。いくらアイマスク体験をしたからといって、目の不自由な方の気持ちがわかるわけではなくて、そのあとその体験をどう生かすのかということを、われわれ教師がしっかり踏まえたうえで、組み合わせをしていくことが大事ではないかと思えます。

野口 笑い話のようですが、初任者に特活と道徳の違いを聞くと、特活の時間は騒がしくて、道徳の時間は静かだといった人がいました（笑い）。道徳の時間を特活のように考えていると、最後にみんなで見聞をまとめてみましようとか、そういう発問になったり、意志決定を行ってしまふ。ですから、その違いは押さえしておく。つまらない授業を脱却し、もっ

と深く考えていくには道徳的实践と特活がリンクすることになるのではないでしょうか。以前道徳と特活を簡単に結びつけてしまったこともありましたが、そういうところに総合单元的な考えは生かされるべきだと思います。道徳の時間に培った道徳的实践力を特活で道徳的实践として生かして行くことですね。その場合は計画的に行っていくことが大切でしょう。一担当がやるというのは、危険性があると思います。なかなかうまく行かないこともあります。体験をした子どもたちは発言の質が高いですね。良質な長文が言えるようになります。

加藤 体験でつかんだものを道徳の授業に生かす場合と、道徳授業でつかんだものを体験に生かす場合があるわけですが、後者の場合は体験が道徳的实践の場となるわけで「なにをデレデレやっているんだ。道徳の授業でやっただろう！（笑い）」ということがしばしば起こりそうな気がします。道徳の時間の目的は道徳的实践力を養うことにあるといわれています。道徳的实践力とは「判断」「心情」

「態度」が総合化したものだといわれていますが、体験を道徳の時間とリンクさせたとき、体験のなかで教師の指導はどうあるべきなのでしょう。じっと見ていればいいのでしょうか。

野口 体験の場の指導というよりも、その体験を組み立てる前の段階ですね。たとえば旅行的な行事、林間学校でもいいのですが、この行事にはどんな道徳的価値があるのだろうかという教師の側の意識が必要だろうと思います。そうした視点で生徒を見ていけば、この子はこんなことをやっているんだとか、もちろんそのなかでも指導はいたしますが、その行事が終わってから書かせる作文のなかでも価値が見い出せるのだろうかと思えます。教師はこのようなことも考えながら、道徳の時間で補充・深化していくことが大事ではないでしょうか。行事をこのような視点で準備しておくということが第一だろうと思います。

加藤 なるほど、やはり教師は体験という活動のなかで子どもたちの動きをしっかり見ていなければいけないですね。

ところが、修学旅行でも体験という段階に入ると教師はやれやれと気を抜くことになりがちです。任せっぱなしでは子どもが見えなくなり、道徳教育としての機能が半減しますよね。体験活動のなかで子どもたちは様々な姿を見せてくれますね。誉めてやりたいところ、修正してほしいところ、そういったことを率直に語っていくべきなんですよね。

林 私は大事な
ことだと思いま
す。道徳の時間
で学んだことを

道徳的実践力を道徳的実践に生かす方法とは

道徳の時間と体験学習の関係

体験に生かすという実践、取組みはいろいろされていると思うんですよ。ただ以前、読ませてもらった報告書のなかで、それは違うだろうと思ったことがあります。道徳副読本に出ていた冒険家の植村直己さんの話で、その項目が「不撓不屈」です。それを学んだ後、総合学習で調査に出るんですが、出発するまえに辛いことがあってもそれに耐えなさいという指導をします。学んだばかりの植村直己さんのことを考えればそんなことは何でも

ないでしょうということですよ（笑い）。これでは道徳も体験も両方とも意味がなくなってしまうですよね。植村さんはだれに頼まれたわけでも、だれかに命令、指示されたわけでもなく、いろいろなところへ行っただけです。そこに意味があるのに、そんなことをいわれたら、子どもたちは辛いことを、ただやらされるだけなのかなと思ってしまうよ。

体験の場では誉めるべきは誉める。しかし、直すべきところは叱責するのではなくて、アドバイスという形で子どもたちに伝えていければいいなと思います。**岡本** そういう物事をストレートに結びつけるやり方がよくありますね。林間学校のまえに登山の読み物資料をやって、集団から離れることがどんなに危険であり、また人に迷惑をかける行為であることを教えたり、二月にバレンタインデーの読み物資料をやったりすると、生徒は

「またかよー」という顔をします。

林 すぐに教師の考えていることの底が割れて、生徒の答えもそれに合わせてきます。中学生の気持ちをあまり大事にしないアプローチですね。

野口 近々合唱コンクールがあるから、合唱の資料で道徳の授業をやるといって、あまりにも見え透いた生徒の行動を統制するようなのはだめだと思います。学

年のはじめ、四月の
再生欲求ではありま
せんが「これから頑
張ろう、いろいろな

ことを考えていこう」という時、適時性のある資料を扱うことはあってもいいと思うし、そのときどきにふさわしい資料選びは一向にかまわないと考えています。**林** 状況とか発達段階を踏まえて、それにふさわしい資料選びをするべきでしょうね。**瀬戸** 野口先生がおっしゃったように、中学生も高学年になると「しらの授業」が増えてきますね。道徳の授業をはじめ

徳資料の読解指導をしてしまう人がいる。ひどい例を挙げると「さあ、これから読むのよ、分けて読みましょう。最初に君、次が君」そういつて読ませるのが一読目、つぎに「さあ、今のはなんて書いてあった？ 最初に戻ってみよう。だが、それがなんといった？」そう発問すれば、子どもたちは活発でさつと手が挙がって答えます。これが二読目。「じゃあ、先生が最初からもう一度通して読むからよく聞いていなさい。感動したところには線を引いて」なんていつて読む。これで三読です。「さあ、これから先生が大事なことをいうわよ。よく聞いていなさい」なんていつて、大事などころを解説するわけです。これで四読。そして「最後にみんなで心を込めて読みましょう。感動しました？」になる。これを「五読」といいます。

これでは道徳の授業にはなりません。読み物資料は解説しなければわからないようなものでは困りますし、さつと読んでどきつとするようなところが道徳資料にはあるんです。また文脈から離れても

いい。文面ではないんです。素材が提供する価値について道徳の授業は展開されるべきものです。

最後に自分の意識のなかで、そのことが明瞭な概念になる。

つまり導入部で生徒に課題性に気づかせる。つぎにそれまでの価値観を変容させる。そして明瞭な概念を抱いたと自覚させる。その三つが成立していれば、それが道徳の基本形になると思います。素材の採り方、授業の方法・手段は様々あって当然だと思います。但し、道徳の授業には全体計画というものが要です。から、学年ごとに基本資料、基礎的な方法・手段は共通であることもある程度必要でしょう。そのなかで予備資料、方法があつてしかるべきですが、ただ奇をてらうことになるか、そうではなくて奇が奇でなくなるかは、その三つの条件を満たしているかどうかによります。

道徳の時間とは別に、日常的な指導はしっかりやった方がいいと思います。たとえば、挨拶をしっかりとしようというのは当然で、そうした指導はなにも道徳の

時間だけでやるものではないでしょう。道徳の時間は、それがなにを意味するか指導することです。ひどい学校になると、日替わりの目標が書いてある場合があります。今日は「ていねいな言葉で挨拶をしっかりとしよう」、翌日は「整理整頓をしよう」なんてね。前の日の目標が達成できていないのに、翌日は違った目標では生徒も「明日の目標はなんだろう？」と思うことになりかねません。極端なことをいえば一学期にひとつの目標くらいでいいのかもしれないね。

加藤 あらためて瀬戸先生から道徳の時間の成立条件として三点を教えてくださいました。①導入部で生徒それぞれに、今日のテーマは自分のことかなあと思わせる。不明瞭な直感としての問題を意識する。②展開のなかでその時間のテーマ、つまり価値に関わる自分の意識が少しでも変わること。③最後にいままでの自分と違った自分を見つめ、言葉に出してそれを説明できる。明瞭な概念化ですね。以上の三点がセットになってはじめて道徳の授業は成立したといえるのですね。

瀬戸 たとえば、お説教のように教師がお話をする時間がありますよね。とくに中学校の先生はそれが好きなんです、それも道徳の授業なんですよ。

かつて九州のある学校ですごい先生の授業を拝見したときのことを話します。授業時間になって先生が教室に入ってこられました。しかし、生徒は騒がしくてなにかいわなければとても授業は始められない状態でした。その先生はしばらく黙って教室を見回していましたが、やがて口を開きま

した。「おれよー、むかしおふくろを泣かしたことがあってよー」というと、教室が急にしんとして、生徒が先生のいうことに耳を傾けはじめた気配を感じました。先生は続けます。「中学二年のときだよ」そういつて述懐が始まりました。そうなると生徒が先生の話完全に集中していることがよく理解できました。そのあと短い時間でしたが、お母さんはすでに亡くなっているけれども、こういう

ふうに思わせたことがあったと話しました。これはうまいぞと思いつながらみていたんですが、最後になにをいうかと思つて気がかりでした。もし、先生が「いいか、だから家に帰ったらお母さんを大事にするんだぞ！」なんていつたら、授業はおしまいです。

しかし、その先生は「先生はいまでも心に残っているんだけど、どうだろう。みんなも自分で家のこと、お母さんのこ

道徳授業を成立させるための三つの条件

すばらしい道徳授業はいかにして可能となるか

とを考えてみよう」そういいました。そして、なかにお母さんのいない生徒がひとりいて、先生はその生徒に「お母さんは、いなくてもどこかにいらっしやる。だから考えてみよう」。それで授業が終わったんです。要するに三要素がみんな入っている。たいへん感動しました。さっきの加藤先生の一枚の写真の話もそうだけれども、子どもたちの気持ちが高まって目的が達せられるなら、方法に

こだわることがなくても、方法を超えてもいいと私は思います。資料集のなかに白い頁があつて、そこに教師があらかじめそれぞれのお母さんに頼んで手紙を書いてもらつて、道徳の時間に生徒に渡して、そこに貼り付けて読ませて、それから授業を始めるといふような工夫があつてもいいと思います。手紙の内容は、その子の生まれたときのこと、ご両親がそのとき願つたことなんかですね。

加藤 そういうすば

らしい授業をなさる先生というのは、人間に対する深い洞察

力があるように思います。そして、自分の生き方、もののとらえ方が曲がっていない。柱がしっかりしているから、他人の発想を借りずに自分の知性と感性で消化していくんでしょね。

しかし、一般の先生方にそこまで期待することはできません。でも、どんな先生にでも一定水準以上の道徳の授業はしてもらわなければなりません。ですから、それができる指導書が必要になります。

手前味噌になりますが『中学生の新しい道』の指導書はその点に最大限の留意をしました。道德の授業の進め方がまったくわからない初心者でも、指導書を事前に読み、発問意図や板書構成に目を通して、一応水準以上の授業ができると自負しています。

例えば悪いですが、漢文の素読を繰り返していくうちにそれを暗記し、成長とともにその意味するところを真に理解していくように、まずは素になってやって欲しいと思いますね。実践するうちに瀬戸先生がおっしゃった三つの要素が組み込まれた授業展開がどういうものか、わかってくるはずですし、読み物資料以外の資料でもその扱い方がわかってくると思うのです。それだけの自信はありますね。

『中学生の新しい道』 ——課題と期待——

加藤 『中学生の新しい道』は、私たちがこれまで大きな影響を受けてきた瀬戸

先生のお考えに基づく道德授業を念頭において作成した道德副読本とその指導書です。

大館 指導要領には中学校では23の価値項目が設定されていて、それに基づいて『中学生の新しい道』には一年から三年生まで、それぞれ23の自作資料を中心にした読み物資料が収録されています。そのなかのいくつかについて、お話しさせていただきます。

23の価値項目は、ひとつひとつゆるがせにできないものばかりですが、なかでも義務教育を終えるまでにこれだけは身につけておいて欲しいと思える、いわば重点的な価値というものがあのような気がいたします。私は「生命の尊重」という価値項目がそのなかの一つだと考えています。それは自分自身、周囲、そしてもっと広く国際社会、いわば地球規模にまで広げて考えていくべき価値項目でしょう。『中学生の新しい道』には発達段階に応じた三つの読み物資料があって、ちょうどその項目では一年生が「一冊のアルバム」。自分自身の命がどれだけ大

切に育まれてきたかを考える資料。二年生では「リハビリ」という題名の自分の命は自分だけのものではないということを理解させるための資料。三年生は「国境を越えて」という題名で、一人の命を救うために国境を越えて協力しあうという内容の資料です。

私は、こうした資料からなにをくみ取ってもらいたいのかといえば、具体的な事例の理解ではなくて、その周辺、奥底にあるもの、おそらくふだんあまり接したり、聞くことのない、慣れ親しんではこなかった純粋な意味というものなんです。そういうことを考えることのできる人間、そういうことを考えるための筋道のようなものを感じ取ってもらえたらいいな、卒業するときまでに、そういう習慣をもった人間になっていくれたらと願いつつ指導をしています。

また私の学校の先生方が指導書をこまめに開いてくれているというのも、新しい経験でした。

—— 導入部で、たとえ話をして人の興味を引きつけるというのは、仏教説話な

どに見られますね。白い牛が荷役に使われているといいますと、インドの人は白い牛は神様のお使いだと思っ
ていますから、その話を聞いただけで驚いて、その話をしている人の方を向きま
す。みんなの注意を十分引きつけたところで、いまのは嘘だとい
う。みんなが怒ると、だつてそうとでもいわないとみんなは話を聞
かないじゃないかとお釈迦さまがいいま

す。これを嘘も方便というらしいんです。そのあと、大切な意味の話を
する。道徳の資料集もそれに似た役割を果たしている
のでしょうか。最初から意味の話
をしますと、そうした訓練を
経ていない人間がそつぽを向くのは当然
ですね。

大館 修学旅行でもそうなんです
が、ただ行って、見学しているときは感
心しても、帰ってきたらすぐに忘れてし
まう。そこにある意義を持たせるには、
意味に気づかせるしかありません。たぶ
んそういうものによって知性というもの
の契機が生ずると思います
が、そういうことを習慣づけると
思いますが、そういうこと
を習慣づけるというか、習慣
までいかなくても、そういう世界
があるんだと

いうことを知ってもらいた
いですね。
岡本 私の学校では、現在の『中学生
の新しい道』平成十七年度版を、特別に許
可をもらって去年から使用させてもらっ
ています。

先生方の評価を聞いてみると、古くさ
いところが払拭されて、タイムラグによ
って生じた生徒に通じなくなっている風
俗や習慣を生徒にいちいち説明する必要
がなくなつたとか、場面絵をプリントア
ウトして黒板に貼れるようになったの
で、それが後押ししてくれるような気が
して、道徳の授業に自信がなくても、余
裕をもつことができる
とか、指導書が実際
的なので心強いなど様々ですが、たい
へん好評です。

私は現在クラスをもっていないので
すが、道徳の時間には校長、教頭、教務主
任と私の四人で各クラスを回っていま
す。また提案授業という
ことで、『中学生の新しい道』の二年生
用に「わたしのいもうと」
(松谷みよ子作)が載っていますので、
加藤先生を講師におよびして、
ゲストティーチャーには、この七月に「心

のノート」という歌でメジャーデビュー
したシンガーソングライターの大野靖之
さんにきていただいて、授業を展開しま
した。大野さんには詩の後半部分をご自
身で作曲したものを歌っていただいたり
したんですが、子どもたちが話し合いの
なかで「いじめること」「いじめられる
こと」にしっかり向き合つて、泣きなが
ら思いを語ってくれた生徒もいました。
私はこの授業を通じて、生徒たちの「い
じめ」についての認識に新しいものが加
わつたと確信しています。

それから本校における道徳の授業全般
の話題が休み時間、放課後の職員室で、
豊富に出てきたと感
じられます。

「寝息」という資料は私の自作なんです
が、主人公を二十歳前後の若い夫婦に
設定しました。男女ふたりが協働でわが
子を育てるとい
う、いままでの資料集にはない話
ですが、中学生ではあつてもか
なり理解を示して、話し合いが深ま
つたということ
を聞いております。

また、スポーツ万能で学校ではもちろ
ん、近隣ではいつでもトップの生徒がい

て、いつもは少し生意気で、道徳の授業で発表をしたこともなかったんですが、全国大会で負けたあと、加藤先生がお書きになった「体育祭」という資料を使った授業で、手を挙げて「初めて自分の前を走る競争相手がいる経験をした。屈辱というものがどういふものかよくわかった」と発言したそうです。担任がとても感動していました。こういう報告を聞くのと、よかったなあと思います。リニューアルされた『中学生の新しい道』にはそのほかにも、いろいろな扱い方ができる資料があります。ぜひ使っていただきたいと思います。

加藤 私も最近嬉しく思ったことを話します。同じ三年生の資料集に「修学旅行」「この地球に生まれて」という資料が載っています。実はこのふたつのテーマ、前者が日本の文化伝統、愛国心、後者が世界貢献、人類愛といったところがテーマですが、たいへん扱いづらいテーマとみえてめったに授業を見たことがありません。ところが『中学生の新しい道』の十七年度版になってから、やってみまし

たという声かけっこうあるんですよ。じつは、このふたつの資料に登場する主人公は、今の中学生と比べるとかなりレベルの高い中学生として描いているのです。

「修学旅行」では京都の寺院の広大な伽藍の屋根に葺かれた膨大な量の瓦を見てそれを焼いた当時の陶工たちに、太い円柱を見てそれを切り出した杣人たちに、寺院建築の木組みを見て宮大工たちにそれぞれ思いを馳せています。今、そんな想像力を働かせることのできる中学生はたいへん少ないと思うのですが、私からすれば、それくらいの感性はもっていて欲しいという願いを込めたつもりなんです。テーマの性格上、授業は難しいかもしれませんが、資料に惚れてチャレンジしようという動きがかなりあって、それが嬉しいですね。

また「この地球に生まれて」も、主人公はたまたま生まれ落ちた国の違いで、一方は豊かな生活を謳歌し、他方は食うに困るほどの生活を強いられていることに不条理を感じているのですが、修学旅

行と同様、主人公と同じような感性をもつて欲しいという願いを込めています。そんな中学生は極めて少ないと思います。が、つい最近、私の中学校の属する地域の研究集会で、黒柳徹子さんの『トットちゃん』とトットちゃんたち』という本とリンクさせ、三時間展開の実践が報告されました。

とても大事な価値項目でありながら、いままでも扱いづらいということと敬遠されてきたきらいのあるテーマでしたが、これにチャレンジする例が報告されてきたことが心強いし嬉しいですね。

岡本 価値項目の最後の四つは、二月、三月に設定されていることが多く、やらないまま進級したり卒業したりということが多かったですからね。

野口 立場上『中学生の新しい道』について直接的な論評は差し控えたい(笑い)と思いますが、いろいろな資料を血眼で探す、ストックするという努力が先生方には必要ですね。また道徳の時間の量的な管理ということを考えれば、個々の先生方がどれくらい道徳の授業をしている

のかということもあると思います。たとえば、音楽、美術、技術家庭の時間も週に一回、一時間で、その翌週はないときもあります。道徳はそれと同じだけあるわけです。ことに連休がある月は続けて三週間、たとえば美術の時間、音楽の時間がなくなることもありますから、その教科の先生方が、なんとかして下さいとお願いする場合もあるでしょうが、道徳の場合はたとえそういうことがあっても、どうしようかと考える先生方は少ないのではないかと思います。

資料のことに話を戻すと、資料は単に垢を落とすだけの「垢こすり」資料ではないという話を聞いたことがあります。『中学生の新しい道』に収録されている資料は、価値の覚醒に至るには同質と異質のものがなければいけないんですが、それがうまくちりばめられていると思います。

たくさん楽しい資料を用意して、道徳の時間を先生自身が心待ちにするような環境を自ら整えるべきだと思っています。

加藤 この副読本は中学校の現役の先生方が集まって資料を自作し、私なりの視点でかなり厳格な監修をさせてもらって完成させましたが、大館先生、自作資料にご自身の道徳授業のイメージがどう反映されていますか。

大館 中学校は忙しいとよくいいますが、部活・生活指導等、様々な事ながら追われて心が急いでいるようななかで、不慣れではありますが参加させていただいてたいへん勉強になりました。うまくいったかどうかは別にして、やはり資料の構想を練ったり書いているときに、具体的に子どもたちの顔が浮かんで、こんな質問をしたり、こんな問いかけをしたらどうだろうとも思いましたが、かえって反応のイメージも具体的になりすぎて、どうしても予定調和的になってしまっているものから、頭の中から追い払うのに苦労したくらいです。

加藤 私は学級を担任していませんし、立場上、ある程度の距離をとりながら中学生と接しています。そうすると、目にする中学生の姿をいつもある種のカテゴリ

リーに分別して見てしまう悪い癖が生じてしまうのですが、資料を自作するときにはそれが役立ちますね。登場人物のキャラクターとして描き分けるのが容易になるんです。描きながら、道徳授業の展開を意識し、登場人物の変容という形で理想の姿を加えていくのです。ですから、資料を自作しているときは自然に道徳授業を濃厚に意識していますね。

さきほど、野口先生から「同質と異質」というお話がでしたが、私の資料はだいたい四段落構成になっています。まず、瀬戸先生がおっしゃるように導入部分で子どもたちの問題意識にどう働きかけようかと考えます。次に同質をどう描くか、さらに異質をどう描くかを考えます。異質は別の人物で描いてもいいわけですから、このあたりの工夫が面白いところですね。最後に価値の覚醒場面を考えます。ことを成した後の、あるいは弱い心乗り越えた後の清々しさを描くのです。この四段落構成はたいへん書きやすいし、授業と即リンクします。資料が分かりやすいとの評価をいただいていることの理

由はこのあたりにあるのではないかと思っています。

野口 むかしの修身の教科書には美談だとか伝記がたくさん載っていますね。注目的というか、indoctrination（教化）とっていいと思うような形ですが。現在は問題提起型が出てきて、それを解決して行く。とくに公德心などはそれが主流ですね。私はどの程度の比率でいろいろな種類の資料を入れるかということは別にして、もう少し美談、伝記を入れてもいいと思ってるんです。もちろん副読本が一冊あればいいということではない。だんだんと改定も進んでいくでしょうから、一年生から三年生までの収録資料をいろいろ変えていってもいいと思います。

—— よく古くさい資料という言葉を聞きますが、具体的にはなにを指すのでしょうか。

岡本 生徒たちが表記された道具、習慣、時代背景、風俗などの生活全般が理解で

きないというのは困りますね。いちいち説明しなければいけませんから。もつとも古くても、名作といわれる資料はたくさんあります。

林 私は道徳資料を考えると「共感」ということを念頭におきます。身近な人に対する共感はやさしいですが、遠くの見ず知らずの人に対する共感はいくくかわりです。たとえば地理的にも遠い、生活習慣も違うアフリカに住んでる人々に

道徳資料への共感 は 地理的、時代的距離を越えて

名作の所以とは素材が提供する価値

対しても共感できるというのが理想だと思えますね。その意味でいえば、時代的に遠い人々に対する共感も必要ですね。ですから、そうしたものも資料集に入れるということは必要かもしれません。

大館 「星野くんの二塁打」だったらいまの中学生でもすぐに理解できるでしょうけれど「足袋の季節」などは理解できない部分が多いかもしれません。しかし、

名作といわれる所以は、それを越えてなお共感と感動を与えられるということでしょうか。

野口 時代を超えた名作というのはありますよね。五十銭がわからないという問題ではなく、ただ切り口の問題でしょう。

加藤 文学作品の一部を切り取って、道徳資料に使うということの問題性は、かつてかなり論じられましたよね。

原作者からみれば甚だ遺憾という指摘を受けて、それでなくなってきた

面もありますね。

瀬戸 副読本の黎明期のころは、盛んにそれをやりました。作者に最初からまかりならんといわれたこともありまして、承諾をとつても、資料として使うわけですから少々変えざるを得ません。その間になんども見せたり、最終チェックをしてもらうなど時間がかかりました。さきほどから出ている地理的、時代的な距離感、たしかにそうしたものを皆無にして

しまうというのは問題かもしれません。時間を超えて、時代を超えたものが、むしろ数点は入っていた方がいいでしょうね。思うところは同じであって、むしろつかみやすい、使いやすい面も出てくるかもしれません。

それから、この挿絵についての評価はどうですか。

加藤 おおむね好評をいただいています。もつといろいろな人が描いた絵やマンガチックな絵もあった方がいいという意見もあります。今回の『中学生の新しい道』に関していえば、ただ視覚的に取り付きやすくとかという感覚をねらったのではなく、挿絵も文章と同等以上の価値をもった資料そのものとしての扱いになっています。使用して下さっている先生方からはとても使いやすいと評価していただいている理由は、挿絵を授業展開になくてはならないものとして位置づけたことも大きいと考えています。

挿絵の重要性は早くからいわれてきましたが、それをはじめて実現したと自負

しています。

林 授業の展開の一方法として、絵だけを示すということも考えておられるんですか。

加藤 極論をいえば、それも十分可能だと思っています。たとえば「シンプル・イズ・ビューティフル」の最初の挿絵ですが、これを見せるとほとんどの生徒が「自分の部屋だ」といいます。次に中途視覚障害者の整理整頓された美しい部屋の絵を見せ、感想を問います。すると「とても気持ちがいい」と答えますよ。そこで「美しく整頓された部屋は気持ちもいいし、居心地もいいのにどうして整頓できない」と聞くと「いや、捨てられないものが多すぎて整頓できない」なんて答えます。「でも、気持ちのいい部屋にしたいだろう。だれに見られても恥ずかしくない部屋にしたいだろう。どうすればいいか考えようよ」というふうには、文章を読まなくても展開していけるんですね。

林 私はすべて二回ほど読ませていただきましたが、自作資料のなかにとっても感

動的で涙腺がゆるむようなものがいくつもありました。とてもいい副読本ですね。これを合本にして大人向けに一般販売してもいいほどだという気持ちでいます。こういったオースドックスな資料集を使った道徳の授業について最近の研究会などでは、新しいものに目がいく一方であまり論じられなくなっていると思いますので、もういちど見直していったらどうかと思います。

瀬戸 ルビがふつてあるのがとても配慮が行き届いていると思いました。これはいいことです。また自作資料の作者のみなさんがとても感性豊かで、子どもたちのことがよくわかっているなと思って、たいへん感服しました。

加藤 長時間ありがとうございました。次回の改訂版は平成二十年度に発行する予定で、すでに準備にかかっています。今日のお話を参考にして、さらに『中学生の新しい道』とその指導書の完成度を高めたいと思っています。今後とも、ご助言をいただけますようお願いいたします。

了(文責・(株)日刊企画)